

【 1 】

氏 名	金子晴勇 かね こ はる お
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第100号
学位授与の日付	昭和50年11月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ルターの人間学

論文調査委員 (主査) 教授 武藤一雄 教授 武内義範 教授 山田 晶

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、宗教改革者マルティン・ルターの思想を、もっぱら、その人間学という視点に集中して解明しつつ、しかもそれによって、ルター神学の全体的・根本的特質を明らかにしようとするものである。

本論文の第一部「ルターの人間学の特質」は、第一章「哲学的人間学と神学的人間学」、第二章「内的人間と外的人間」、第三章「創造・墮罪・救済」、第四章「義人にして同時に罪人」、第五章「宗教改革的人間学の成立」の五章から成り、それぞれの章が、さらに細かく分節されて論述されている。

本論文の第二部「ルターの人間学における良心概念の研究」は、第一章「中世思想史における良心とシンテレシス」、第二章「初期ルターのシンテレシス概念」、第三章「初期ルターの良心概念」、第四章「試煉を受けた良心の神学」、第五章「『ガラテヤ書講解』(1531年)における良心と試煉の意義」、第六章「生と死の弁証法」、第七章「良心の倫理」、第八章「ルターと現代思想における良心の問題」の八章から成り、第一部の場合と同様に、この場合も、それぞれの章が、さらに細分された諸節において論述されている。

本論文は、上記二部のほかに「付論」として、「宗教的基礎経験の意義について——アウグスティヌスとルターの比較考察」が載せられ、それが本論文の末尾に置かれている。

以上が、本論文の大体の構成である。

本論文は、A5、600頁に近い大冊の公刊書として提出されており、きわめて多岐にわたって論ぜられている内容について、いま逐一述べることはできない。できるだけ簡略を旨として述べたい。

第一部「ルターの人間学の特質」は、ルター神学の思想的発展をたどりつつ、その中から、彼の人間学的根本概念と命題とをとりあげ、それによって彼の人間学の特質を考察している。第一章の「哲学的人間学と神学的人間学」においては、ルターにおいて、「身体・たましい・霊」という哲学的人間学の区分と、「霊・肉」という神学的人間学との区分が、区別されながら統一的に把握されるにいたる過程が明らかにされている。第二章「内的人間と外的人間」は、主として「ローマ書講解」(1515—16年)によって、い

いわゆる「ルターの内面性」の特質を明らかにしている。第一部その他の諸章について述べることは省略するが、この第一部において、ルターの神学的にして且つ宗教哲学的ともいべき人間学の全体像がほぼ明らかにされているといえる。特に、「義人にして罪人」というルターの基本的命題についての解明、中世におけるミリタス思想の発展、およびルター自身におけるファミリタスの概念の把握の仕方の変遷などについての論述が注目を惹く。

第二部「ルターの間学における良心概念の研究」は、彼の人間学の中でも最も重要な意味をもつと思われる「良心」概念についての詳密な研究である。先ず、ルターにおける、中世スコラ学でしばしば用いられたシンテレーシス概念の受容およびその概念の止揚にいたる経緯が述べられ（第一章、第二章）、次いで、初期ルターの「良心」概念が究明されている。さらに、カール・ホル以来論ぜられてきたルターのキリスト教を「良心の宗教」とみなす考えが取り上げられ、ホルのカント的道德主義と連なるその理解を批判しつつ、良心の超道德的・場所的・神律的性格を明らかにし、ルターのキリスト教が、「良心の宗教」と称されて然るべき真相が究明されている（第三章）。第四章では、ルター神学の根本的性格が、良心の試煉をとおして形成されている点が闡明され、この場合「試煉」のもつ宗教的意義が詳細に論ぜられている。第五章の『ガラテヤ書講解』（1531年）における良心の試煉の意義は、ルター神学のほぼ完成期に当るこの著作に即して、ルターの「良心の宗教」の真義を解明しようとするものであって、恐らく、本論文における中心的位置を占める論述であるが、そこにおいて、ルター神学における「教義」と「良心」との相反と統一について秀れた見解が示されている点が注目される。第七章および第八章における論述においても、あるいは「律法と福音」の問題に関連して、あるいはルターの「信仰の倫理」の究明という見地に立って、「良心」概念のさらに立入った考察が行なわれている。第二部の最終章をなす第八章においては、「ルターと現代思想における良心の問題」が究明されるとともに、近代から現代にかけての多くの哲学者・神学者（カント、ヘーゲル、キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガー、ヤスパース、ティリッヒ等）の良心論を顧みつつ、ルターの良心論の今日における意義が、著者自身の実存にかかわる問題にほかならないことが明らかにされている。

「付論」として掲げられた「宗教的基礎経験の意義について」は、アウグスティヌスとルターの比較考察を行なっているものであるが、そこでは、両者の宗教的原体験の相違点と一致点について論究され、著者のルター研究が、アウグスティヌス研究を踏まえているものであり、両者の比較研究が、ルター神学の特色を明らかにする上に重要な意義をもつことが示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、A 5、600頁に近い大冊の著書として提出されたものであるが、本邦におけるルター研究書としては、きわめて包括的であるとともに、また最も高度で緻密なルター研究書であると認められる。

著者は、本書の序論の中で、「ルターの思想を従来なされてきた神学的・教義学的理解の狭い枠から解放し、広く人間学的視点から解釈し直し、今日における実存的意義を解明すべき時にきている」と述べているが、このような言葉のうちに看取される本論文の意図は、全篇を貫いて十分に達成されていると思われる。また著者は、本書の中で、「人間学的レベルに現われる問題は、神学者の思想の全射程が見られる

鏡である」というルター研究者S.オズメントの言葉を引用しているが、たしかに、本書は、ルターの「人間学」に焦点をしばって論述されているにもかかわらず、そのことによって、おのずから、ルター神学の全射程を照らすきわめて充実したルター研究書となっているといえる。

著者の学究生活は、先ずアウグスティヌス研究に没頭するところから始まるが、その後、本学の大学院博士課程に進学して以来、ルター研究に専心し、十数年の研鑽を積んできたその成果が、本書のごとき労作を生んだのである。著者のルター研究は、アウグスティヌス以後の中世の神学的・哲学的思想史との連関の中で行なわれているが、そのような思想史的研究においても、著者の並々ならぬ造詣が示されている。特に1509年から1521年にいたる比較的初期のルター思想について——例えば、「神の像」(imago Dei)、原義(iustitia originalis)、フミリタス(humilitas)、シンテレーシス(synteresis)等の諸概念が、ルターにおいていかに受容され、また変容されていったかという問題や、ドイツ神秘主義とルター神学との関係の問題等について——、中世の思想史背景が絶えず顧慮されながら、克明な研究が遂行されている。

本書は、その第一部において「ルターの人間学の特質」を論じ、第二部において「ルターの人間学における良心概念の研究」を行なっているが、いずれの場合も、思想史的脈絡が重視され、またそれと相關的にルター自身の思想形成の跡が丹念に辿られている。

第二部の良心論は、第一部の「ルターの人間学の特質」を基盤として叙述されているが、この良心論が、著者の最も力を傾注し、またその研究成果を最も顕著に示している部分であることは疑いを容れない。またこの第二部において、晩年に到達されたルター思想の帰結から、ルター神学を全体として統一的に理解する試みがなされているが、なかんずく第二部第五章「『ガラテヤ書講解』(1531年)における良心と試煉の意義」は、本書における最も秀れた学問的成果を示しているといえるであろう。この章において、著者が「試煉を受けた良心の神学」と特徴づけているルター神学の特質が、ルターにおける「試煉」の諸形態の緻密な研究と相俟って闡明されている点が注目される。第二部第八章「ルターと現代思想における良心の問題」は、著者のルター研究が、現代に生きる著者自身の実存的関心と不可分離のものであることをよく示しており、本書の全体が、ルターの実存と著者自身の実存との生ける交流において成り立っているものであることを鮮明に印象づける。

本書の不備な点、ないしは欠点も、幾つか指摘されうるであろう。例えば、ルター思想を、従来の神学的・教義学的理解の狭隘さから解放された「宗教哲学的研究」として提示しようとする著者の試みは、その大いなる努力にもかかわらず、なお十分な説得性を欠く点が残されている。また「付論」で試みられたアウグスティヌスとルターとの比較考察は、ルターのアウグスティヌスと異なる思想的特色を、著者自身もルターと一体化して強調しようとする余り、アウグスティヌスの思想を深く内在的に理解するという点で、なお十分に透徹していないという憾みがあるといえるであろう。

しかし、いずれにしても、著者が幾つかの現代語訳を参照はしているものの、大体において、大部分ラテン語で書かれているワイマール版全集に収められた原資料のうちの主要なルター著作の多くを、丹念に読破し、さらに、夥しいルター研究書のうち顕著なるものを、十分に参照し、且つ批判的に検討して、このような大いなる労作を公刊するにいたったことは、日本におけるルター研究にとって劃期的な意義を

もつものであり、ひいては、日本のキリスト教学界に寄与するところ大であると認められる。のみならず、その詳細な「良心論」の研究にいたっては、諸外国における卓越したルター研究書に伍して、十分な存在意義を主張しうるものであると考えられる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。